

ハザードが特定されなかった案件とその理由

※分類

- ①評価対象抗菌性物質が、ヒトで使用されておらず、他のヒト用抗菌性物質とも交差耐性を示さない
- ②評価対象抗菌性物質が、食品を介してヒトに伝達する可能性のある感染症に使用されない、又は推奨薬とされておらず代替薬が充分ある
- ③その他(家畜で耐性菌が確認されていない又は耐性率の上昇がない等)

成分	評価書 No.	年	ハザードが特定されない理由	
			分類※	詳細
モネンシン ナトリウム	1	2006	①	<ul style="list-style-type: none"> ・モネンシン及び類似の抗菌性物質がヒトで使用されていない ・モネンシンがヒトで使用されている抗菌性物質と交差耐性を示したという報告がない
ノシヘプタイド	3	2012	①③	<ul style="list-style-type: none"> ・ノシヘプタイドは家畜のみに使用される抗生物質であり、ヒトに使用されている抗菌性物質と交差耐性を示したという報告がない ・野外で家畜由来耐性菌がほとんど認められていない
センデュラマイ シンナトリウム	6	2013	①③	<ul style="list-style-type: none"> ・センデュラマイシンは家畜のみに使用される抗生物質であり、ヒトに使用されている抗菌性物質と交差耐性を示したという報告がない ・野外で家畜由来耐性菌が認められていない
ラサロシドナト リウム	7	2013	①	<ul style="list-style-type: none"> ・ラサロシドがヒト用医薬品として使用されていない ・ラサロシドがヒトに使用されている抗菌性物質と明確に交差耐性を示したという報告がない
サリノマイシン ナトリウム	8	2013	①	<ul style="list-style-type: none"> ・ヒト用医薬品として使用されていない ・サリノマイシンがヒトに使用されている抗菌性物質と明確に交差耐性を示したという報告がない
ナラシン	9	2013	①③	<ul style="list-style-type: none"> ・ナラシンは家畜のみに使用される抗生物質であり、ヒトに使用されている抗菌性物質と交差耐性を示したという報告がない ・野外で家畜由来耐性菌がほとんど認められていない
フラボフォス フォリポール	10	2013	①③	<ul style="list-style-type: none"> ・フラボフォスフォリポールは家畜のみに使用される抗生物質であり、ヒトに使用されている抗菌性物質と交差耐性を示したという報告がない ・野外で家畜由来耐性菌がほとんど認められていない
アピラマイシン	12	2014	①③	<ul style="list-style-type: none"> ・アピラマイシンは家畜のみに使用される抗菌性物質であり、ヒトに使用されている抗菌性物質と交差耐性を示したという報告がない ・野外で家畜由来耐性菌が認められた報告はあるが、耐性率が上昇する傾向にはない
エンラマイシン	14	2014	①③	<ul style="list-style-type: none"> ・エンラマイシンは家畜のみに使用される抗菌性物質であり、現在国内でヒトに使用されている抗菌性物質とは作用機序が異なることから交差耐性はないと推測された ・野外で家畜由来耐性菌が認められていない
フロルフェニ コール	18	2016	②	<ul style="list-style-type: none"> ・牛及び豚に対してフロルフェニコール製剤を使用することにより、フロルフェニコール及びこれと交差耐性が認められるクロラムフェニコールに対する薬剤耐性菌が選択される可能性は否定できないが、食品を介してヒトに伝播する可能性のある感染症に対してクロラムフェニコールは使用されない ・クロラムフェニコール耐性菌が認められる家畜由来細菌によるヒトの感染症に対して第一選択薬であるフルオロキノロン系抗菌性物質等が使用される

成分	評価書 No.	年	ハザードが特定されない理由	
			分類※	詳細
酒石酸タイロシン	23	2017	②③	<ul style="list-style-type: none"> ・酒石酸タイロシン製剤が、蜜蜂に使用されることにより、タイロシン並びにこれと交差耐性が認められるマクロライド系及びリンコマイシン系抗生物質に対する薬剤耐性菌が選択される可能性は否定できないが、その特性からはちみつ中で非芽胞形成細菌は生存できない ・はちみつを介してヒトに伝播する可能性のある芽胞形成細菌による感染症は乳児ボツリヌス症であり、その治療に抗生物質が使用されない
フロルフェニコール（第2版）	27	2017	②③	<ul style="list-style-type: none"> ・食品を介してヒトに伝播する可能性のある感染症に対してフロルフェニコールと交差耐性が認められるクロラムフェニコールが使用されない ・クロラムフェニコール耐性菌が認められている家畜由来細菌によるヒトの感染症に対して、第一選択薬であるフルオロキノロン系抗菌性物質や代替薬であるホスホマイシン等が使用されている ・国内の家畜由来細菌の抗菌性物質感受性調査ではクロラムフェニコールに対する耐性率が上昇する傾向はない
ハロフジノンポリスチレンスルホン酸ナトリウム	28	2020	①	<ul style="list-style-type: none"> ・ハロフジノンがヒト用抗菌性物質として使用されない ・ヒトに使用される他の抗菌性物質と構造が異なるため交差耐性が起こる可能性が低い ・共耐性に関する報告がない
ピコザマイシン	29	2020	①	<ul style="list-style-type: none"> ・ピコザマイシンは家畜のみに使用される抗菌性物質であり、ヒトに使用されている抗菌性物質と構造が異なるため交差耐性が起こらない ・bcr 遺伝子を介した交差耐性についてもヒト及び家畜由来野外株で交差耐性を示したという報告がない
亜鉛バシトラシン	31	2021	②	<ul style="list-style-type: none"> ・ヒト用の医薬品としては、国内では、硫酸フラジオマイシンとの配合による軟膏剤としてのみ販売されており、ヒトの医療分野において、バシトラシンが推奨薬とされている食品を介した感染症はない ・国内の家畜由来腸球菌では、バシトラシンの MIC 分布等に大きな変動はみられなかったが、MIC が 256 µg/ml を超える耐性と考えられる株が多く確認されており、バシトラシンに耐性を示す腸球菌が食品を介してヒトに伝播する可能性はある。しかし、これらの食品を介した感染症には、他系統の有効な代替薬が十分あり、バシトラシンは推奨薬とされていない
スルフォンアミド（単剤）	32	2021	②	<ul style="list-style-type: none"> ・国内の家畜由来大腸菌、サルモネラ及びカンピロバクターではスルフォンアミド系合成抗菌剤単剤に対する耐性が認められており、耐性を獲得した上記細菌が食品を介してヒトに伝播する可能性はあるが、これらの食品を介した感染症には、他系統の有効な代替薬が十分あり、スルフォンアミド系合成抗菌剤単剤は推奨薬とされていない